

M-GTA 研究会 News Letter No.98

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（株式会社アクセライト内）

メーリングリストのアドレス：members@m-gta.jp

研究会のホームページ：http://m-gta.jp

世話人：阿部正子、倉田貞美、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、都丸けい子、長山豊、根本愛子、林葉子、宮崎貴久子、山崎浩司（五十音順）

相談役：小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾（五十音順）

<目次>

◇第12回 修士論文発表会

【成果発表】..... 3

張 丹：中国人看護師の異文化間コンフリクトの認知から帰結に至るプロセスの検討－離職意思の有無による相違－

【成果発表】..... 11

張 銀暁：日本国内における日本人の留学生との親友関係構築と維持のプロセス

【ミニワークショップ】.....24

進行：山崎 浩司「M-GTA の分析テーマの設定と分析方法」

◇近況報告29

菊地 真実（医療人類学・社会薬学／在宅医療・薬局薬剤師・医療の生活化）

◇次回のお知らせ31

◇編集後記31

◇第12回 修士論文発表会

【日時】2019年7月20日(土) 13:00~18:00

【場所】大正大学7号館3階731教室

【出席者】98名

赤井そのゑ(東洋大学)・浅川雅美(文教大学)・阿部正子(新潟県立看護大学)・荒居康子(関東学院大学)・有馬実世(玉川大学)・安齋久美子(帝京科学大学)・飯村愛(日本女子大学)・池田稔子(日本赤十字看護大学)・石橋美香(国際医療福祉大学)・伊藤祐紀子(長野県看護大学)・伊藤めぐみ(順天堂大学)・稲延萌希(城西国際大学)・井上みゆき(和歌山県立医科大学)・入野美弥子(特定NPO 千葉精神保健福祉ネット)・石見和世(帝京大学)・上野恭子(順天堂大学)・宇田美江(青山学院女子短期大学)・遠田将大(早稲田大学)・王翠(駒澤大学)・岡本晴菜(大正大学)・小川貴代美(立教大学)・小野香奈(東京有明医療大学)・小畑美奈恵(早稲田大学)・金子時佳(お茶の水女子大学)・烏山房恵(一橋大学)・唐田順子(国立看護大学校)・河本乃里(山口県立大学)・菊地真実(帝京平成大学)・岸田泰子(共立女子大学)・岸野あやか(埼玉県立大学)・木下康仁(聖路加国際大学)・木村和美(和歌山県立医科大学附属病院)・清田颯子(東京経済大学)・倉田貞美(浜松医科大学)・小杉進二(九州大学)・後藤喜広(東邦大学)・小林茂則(聖学院大学)・小山多三代(東京外国語大学)・坂本治子(国際医療福祉大学)・坂本智代枝(大正大学)・佐川佳南枝(京都橘大学)・佐久間桃子(筑波大学)・櫻井理恵(埼玉県立大学)・佐々木栞奈(城西国際大学)・佐鹿孝子(フリー)・篠崎一成(放送大学)・篠原実穂(帝京平成大学)・渋谷睦月(聖徳大学)・嶋崎昌子(長野県看護大学)・嶋津多恵子(国立看護大学校)・島田祥子(東京医療保健大学)・正田温子(早稲田大学)・菅沼宏美(大正大学)・鈴木佳代子(国際医療福祉大学)・鈴木由美(国際医療福祉大学)・隅谷理子(大正大学)・関谷美希(日本女子大学)・高祐子(複十字病院)・滝桃子(日本女子大学)・滝口美香(富士吉田市立看護専門学校)・田中千鶴(大正大学)・谷田悦男(埼玉県立所沢特別支援学校)・田村朋子(清泉女子大学)・丹野ひろみ(桜美林大学)・張丹(武蔵野大学大学院)・張銀暁(武蔵野大学)・長南里歩(女子栄養大学)・辻あさみ(和歌山県立医科大学)・常盤洋子(群馬大学)・戸田京子(神奈川大学)・都丸けい子(聖徳大学)・永田夏代(株式会社湘南ユニテック)・永野淳子(佐久大学信州短期大学部)・西巻悦子(早稲田大学)・根本愛子(東京大学)・根本ゆき(防衛医科大学校病院国際医療福祉大学)・箱崎友美(群馬大学)・橋爪みゆき(大正大学)・濱谷雅子(首都大学東京)・平岡深愛(鳴門教育大学)・平川美和子(弘前医療福祉大学)・平林工志(株式会社マネジメントソリューションズ)・廣川恵子(川崎医療福祉大学)・廣田奈穂美(筑波大学)・細萱伸子(上智大学)・堀切大器(ダイヤル・サービス株式会社)・本多綾(駒澤大学)・McDonald Darren(大東文化大学)・真崎昌子(立教池袋中学校・高等学校)・三浦志織(聖徳大学)・宮口恵美子(聖徳大学)・見山陽介(筑波技術大学)・宮前水樹(大正大学)・村松美奈子(玉川大学)・山崎浩司(信州大学)・山本夕夏(聖徳大学)・横山和世(国際医療福祉大学)・蓬田真以子(聖徳大学)

【成果発表】

張丹（武蔵野大学大学院言語文化研究科言語文化専攻 修士課程修了）

ZHANG DAN : Master's Program in Language and Culture, Graduate School of Language and Culture, Musashino University

中国人看護師の異文化間コンフリクトの認知から帰結に至るプロセス—離職意思の有無による相違—

The Process of intercultural conflict from cognition to outcome for Chinese nurses : Difference by turnover intention

1. 問題意識の芽生え

筆者は1人の中国人看護師として日本の病院で勤務していた2年間、様々な困難や戸惑いを経験してきた。知人の中で、職場で生じた困難をうまく克服できず、また、なかなか職場に馴染めず、惜しんで日本を去っていった人は結構いる。この現状から、数多く日本で就労している中国人看護師のため、彼（彼女）がうまく職場に適応するにはどうすべきか、また、働きやすい職場をどうやって変えていくかを考え始めた。そのため、異文化適応のキーワードの1つである異文化間コンフリクトに着目することにした。

2. 研究背景と先行研究

日本の医療機関では、2008年以降経済連携協定（以下、EPA）に基づき、インドネシア、フィリピン、ベトナムの3ヵ国からの外国人看護師・介護福祉士候補者の受け入れが本格的に開始された。近年では、経済上、キャリアアップなどの理由からEPAスキーム以外の中国人看護師候補者も続々と来日している。法務省(2018)の在留外国人統計により、2018年6月まで、「医療」の在留資格を持つ外国人登録者（医師、歯科医師、看護師など）は1966名である。その中で、中国人は1599名で全体の約80%を占め、最多人数である。2013年の同調査と比べると、5年間で約5倍に急増していたことになる。この結果から、中国人看護師は日本の医療現場を支える人材であるといえよう。しかし、現段階の外国人看護師に関する研究は、ほとんどEPAスキームにフォーカスし、EPAスキーム以外の外国人看護師を対象とした研究はいまだ少ない状況である（龔、2018）。

数少ない中国人看護師を対象とした調査では、主に職務上の困難に関する研究が行われており、言語・コミュニケーション、対人関係と職場適応に関する問題が示されている。（例えば、石原、2012；ト、2017；王・磯山・木内ら、2017など）。これらの研究では、中国人看護師は職務上、様々な困難に直面していることが指摘されているものの、どのように困難を乗り越え、職場に適応していくのかは明らかにされていない。

また、日本の職場における外国人労働者は日本人労働者との異文化接触においては、言葉の壁、文化、価値観の異なりなどにより、異文化間コンフリクト（異文化間葛藤）を抱えていることがこれまでの先行研究が指摘されている（例えば、アフタモヴァ、2012；荻原、

2015 ; 小松、黄、加賀美, 2017 など)。ここでいうコンフリクトとは、個人間、集団間、もしくは個人と集団との間で期待していることが妨害され、関係者が認知する状態である (Thomas, 1976, 890)。また、異文化間コンフリクトとは、文化的価値、状況的規範、目標、フェイスの向き、感情、希少な欲求スタイルあるいは対面 (または仲介) の文脈における結果の知覚された、または実際の不一致である (Ting-Toomey, 2017, 123)。

外国人労働者に関する異文化間コンフリクトの研究から、異文化間コンフリクトの背景には、文化的要因が影響することが分かった。さらに、異文化間コンフリクトを認知した際の解決方略において、当事者の認知や、文化背景など以外に、相手や当時の状況 (職場環境) によっても、コンフリクトに対する解決方略は異なるといえよう。しかしながら、異文化間コンフリクトの帰結、つまり、コンフリクトを解決するための方略を取った後、コンフリクトは解決したのか、解決の成否により人間関係はよくなったのか、上手く職場に適応したのかなどの、コンフリクトの帰結について詳細には触れられていない。

この異文化間コンフリクトの存在が外国人労働者の職場適応の障害や、就労意欲の低下などにつながることを考えられるため、組織だけでなく、多文化就労場面にいる日本人労働者もその実態を把握し、外国人労働者が抱えているコンフリクトの解決に向けたサポートの必要性を理解することが重要であると考ええる。

3. 研究目的と研究テーマ

研究背景で述べたように、中国人看護師は職務上様々な困難に直面している。これらの困難は異文化間コンフリクトの発生につながる事が十分に考えられる。したがって、本研究では、多文化就労場面で就労している中国人看護師を対象とし、業務遂行において、どのようなコンフリクトを認知し、どのように行動をとって解決していくのか、そして、どのような帰結になるのか、その実態を明らかにし、コンフリクト解決に必要な視点を得ることを目的とする。

4. 研究意義

本研究の意義として、次の 2 点を挙げることができる。

第 1 に、中国人看護師の現状に調査することで、日本における外国人看護師の実態把握に新たな知見を提示することが期待できる。

また、コンフリクトの解決プロセスを検討することによって、異文化間コンフリクトを解決するための有効の対処方法、外国人看護師の職場適応の支援のあり方を提示でき、働きやすい職場づくりの一助になり得ると考える。

5. M-GTA に適した研究であるか

まず、看護分野はヒューマンサービス領域が属している。また、看護師は、業務遂行において、職場のメンバー (医師、看護師、介護福祉士など) と協働で目的を達成し、または、

看護される側（患者）にケアを提供していく。つまり、看護師にとって、業務遂行時の社会的相互作用は不可欠であるといえる。

さらに、他者との協働、またはケアの提供の中で生じたコンフリクトをどのように乗り越え、解決していくのかは、プロセス性を持っている。以上のことから、本研究では、M-GTAが妥当な分析方法であると考えた。

6. 分析テーマへの絞り込み

当初の研究目的は、日本の医療現場（多文化就労場面）で就労している中国人看護師は日本就労者または第三国の外国人就労者と業務遂行上、どのようなコンフリクトを認知し、どのような行動を取って解決に至るのか、どのような帰結になるのか、その一連の過程を明らかにすることであった。そのため、分析テーマは「多文化就労場面における中国人看護師の異文化間コンフリクトの認知から帰結に至るプロセスの研究」とした。

しかしながら、実際の調査に行い、調査協力者全員のインタビューを終えて、データを分析したところ、離職意思あり（今年か来年に転職・帰国予定）の協力者と離職意思なし（当面の間・ずっと、日本に看護師として働き続ける予定）の協力者の解決方略は明らかに異なることに気づいた。そのため、分析テーマは、「離職意思の有無による中国人看護師の異文化間コンフリクトの認知から帰結に至るプロセスの相違の研究」と設定した。

7. データの収集とその範囲

調査協力者は日本で看護師として就労経験年数が 2 年以上、かつ現在関東の病院で看護師として勤めている 7 名である。全員は筆者と同じ、病院勤務の前に、日本語の学習及び看護国家試験の準備をするために在籍していた日本語学校の知人である。

また、データの収集について、まず、協力者に研究目的、方法、倫理的配慮などを口頭にて説明、並びに記述した研究計画書、調査同意書を送付し、調査の依頼を行った。その結果、7 名全員の調査協力の承諾を得た。次は、2018 年 7 月から 9 月にかけて、上記の協力者 7 名に協力者が指定したカフェまたはネット電話で 60 分～90 分のインタビューを実施した。協力者が自由に語る雰囲気を作り、直感的な回答を促すために、主に中国語を使用し、インタビューを行った。インタビュー調査の当日、調査趣旨などをもう一度説明し協力を得た。さらに、研究倫理のもとで、対象者の同意の上、IC レコーダによってインタビューの内容を録音した。

インタビュー時の協力者の属性について、滞日年数は 4 年から 9 年、日本で看護師としての就労経験年数は 2 年 6 ヶ月から 7 年 6 ヶ月であった。いずれの協力者も来日前、中国の総合病院で 8 ヶ月から 1 年の看護実習経験を持つが、看護師としての正式な就労経験はなく、日本での就職が初めての就労経験である。

以下は調査協力者の属性である

仮名	性別	滞日年数	看護師の経験年数	勤務病棟	配偶者の有無	将来の予定
A	女	4年	2年6ヵ月	リハビリ病棟	有	来年帰国
B	女	6年	3年6ヵ月	認知症病棟	無	今年帰国
C	男	4年	3年6ヵ月	精神科病棟	有	今年転職
D	女	5年	3年6ヵ月	循環器内科	有	看護師として働き続ける
E	女	7年	4年6ヵ月	整形外科	無	当面の間今の職場に働き続ける
F	女	4年	2年6ヵ月	リハビリ病棟	無	当面の間今の職場に働き続ける
G	女	9年	7年6ヵ月	リハビリ病棟	有	看護師として働き続ける

8. インタビューガイド

基本属性、来日経緯、看護師という職業に対する考え以外、主な質問項目は以下の通りである。

- ①業務遂行において、どのようなコンフリクトを認知しましたか。具体的に教えてください。（医師、同僚、患者など職場に関わりのある人と接触の時など）。
 - ②コンフリクトを認知した際、どんな解決方略を取りましたか。どのように対応していきましたか。具体的に教えてください。
 - ③解決方略を取った後、どのような帰結になりましたか。具体的に教えてください。（例えば、解決方略を取る前と取った後の気持ちの変化、人間関係の変化、生じた結果など）。また、コンフリクトはうまく解決されましたか。あるいは、コンフリクトを解決できずに今も抱えていますか。
 - ④日中看護の相違について、どう思っていますか。
 - ⑤今の職場に満足していますか。病院側に改善してほしい問題点はありますか。
 - ⑥今の職場（日本）で看護師として働き続けますか。なぜですか。
- インタビューでは、項目①、②、③を繰り返し、最後は項目④、⑤、⑥を質問していく形で行った。

9. 分析焦点者

日本の医療機関に就労している中国人看護師

10. 分析ワークシート（回収資料）

11. 結果図（回収資料）

12. ストーリーライン（回収資料）

13. 分析を振り返って

①SVの指導を受け、データの解釈が不十分であること、概念の独自性もはっきりしていないこと、また、結果図に動き（プロセス）が見えないことに気づいた。今後、語りの表面的解釈だけではなく、語りの中で隠されている現象、相互作用による変化もきちんと読み取り、再度分析をやり直したい。

さらに、この研究は M-GTA を用いて、中国人看護師を対象として調査したものであるが、概念名や結果図を作成する時、外国人として看護師としての特性を表すことができない。再度データを確かめ、修正してきたいと考えている。

②この研究では、離職意思なしの協力者のみ選定したほうがよいか。離職意思の有無による解決プロセスの相違を明らかにし、かつパターンを分けずに結果図を作成する場合は、どうすればよいか、分析テーマを再設定したほうがいいかを参考文献を精読し、考えてきたいと考えている。

14. 今後研究の発展

この研究では、離職意思の有無により、コンフリクトの解決方略は違うことを指摘したものの、離職意思の有無が生じる背景や理由、離職意思の有無のメカニズムとコンフリクト解決方略の相違との関係性については検討できていない。つまり、離職を考えていないから積極的にコンフリクトを解決しようとするのかなか、あるいは、コンフリクトをうまく解決したから、この職場に働き続けると思うのかなかがはっきりしていない。

今後、コンフリクトにこだわらず、中国人看護師を積極的に受け入れ病院側の視点に立って、中国人看護師によって、働きやすく、かつ魅力のある職場づくりのため、中国人看護師がなぜこの職場に働いているのか、なぜ日本に働いているのかを明らかにし、日本で看護師としての経験に対する意味づけとプロセスを検討してきたい。

【会場からのコメント概要】

①コンフリクトというと、衝突したり、対立したりする感じだが、この研究のコンフリクトでは、期待へのズレ、対象者本人が認知しているもので、普通の感じるコンフリクトとは違う。そのため、異文化間コンフリクトという言葉がつかめない感じがする。また、ここのコンフリクトは、業務遂行上認知したコンフリクトでよいか。

→この研究での異文化間コンフリクトとは、文化的価値、状況的規範などによる結果の知覚された、または実際の不一致です。また、ここのコンフリクトは、業務遂行するために認知したコンフリクトのことです。

②コンフリクトという言葉は心理学では使われやすいが、看護の領域ではなかなか理解しにくいかもしれないので、ほかの用語を使った方がいいかもしれない。

→もっとふさわしい言葉（例えば、違和感）を考えてきたいと思います。

③プロセスのスタート、つまり、コンフリクトの認知というのは、業務遂行上、誰かと相互作用があつてからなのか、それとも日本に来て職場に配属した瞬間からなのか。

→業務遂行において、コンフリクトが生じた時点がプロセスのスタートです（個人個人が違うこと）。

④帰結とは何か。何かの形で納得する、我慢する、あるいは落ち着いている状態が帰結という理解でよいか。また、帰結について、対極例がたくさん出ているのではないか。

→コンフリクトを解消するための行動を取った後、対象者はどう思ったか、納得したか、また、どんな変化（気持ち、同僚との人間関係など）があるのか、さらに、解決されていないと思ったのも帰結です。対極例が出ていると思いますが、これからデータの再分析を行っていききたいと思います。

⑤なぜ協力対象者は7名なのか。7名のデータを見て、それ以上新しい概念は出てこないと思ったのか。理論的飽和化に至ったのか？

→予定は10名以上だが、期間（修士論文）もあつて、そこまで至らなかったです。理論的飽和化に至ったとは言えないので、もっとデータを取りたいと考えています。

⑥コンフリクトは、職場で解決だけでなく、家族や同僚に支えられたりなど相互作用があるはずだが、この結果図では、どんな動きがあるのかが見えない。また、両パターンの内容はほぼ同じで、違いははっきりしないため、本当にパターンを分ける必要があるのか。

→はっきりした相違があるかどうかは再度データに向き合っていきたいと思います。そこを踏まえて、結果図を描き直したいと思います。

⑦M-GTAの結果図では、度数（件数）を書く必要はない。度数より中身が重要である。件数の多さを言ってしまうと、質的研究としての持ち味が失われてしまう。

⑧対象者がどんなコンフリクトを抱えているのが分からないため、概念名を省略しない。また、概念名が記載されていなければ、カテゴリーの命名が適切かどうか判断できない。

⑨バリエーションが1つの場合は、採用しない。逆にバリエーションが多すぎる場合は分離して別の概念が作れるかを検討する必要がある。

⑩分析テーマについて、離職意思の有無で比較したいのであれば、最初から分析焦点者（離職意思がある人と、離職意思がない人）を分けて、別々の分析テーマに設定したほうがいい

ではないか。おそらく離職意思のない人は、頑張って続けられるので、「コンフリクトの認知から帰結に至るプロセス」というテーマはいいが、離職意思のある人は最初からつまずいて、コンフリクトを認知し、帰結できずに辞めるというプロセスではないか。

→もっとデータを収集してきたいと思います。

⑪離職するかどうかはコンフリクトの認知や解決だけに影響を与えるわけではないと思う。離職につながる理由は他にもあるのではないか。例えば、経済の問題とか、母国の親が「帰りなさい」と願うなど。何かあれば、何を通ったら離職につながらないしないのかをはっきりしないと、サポートなども考えられない。

→ここは鶏が先か、卵が先かという問題だが、離職すると思うからコンフリクトを解決しようとししないのか、コンフリクトを解決できないため離職しようと思うのかははっきりしていないです。今後の課題としたいと思います。

⑫分析テーマは、日本の看護業務に対する中国人看護師が抱く違和感の解消プロセスではないか。もし、違和感を解消できるプロセスが明確に示すことができれば、日本の看護業務に困る中国人看護師にアドバイスでき、役に立つのではないか。

→大変貴重なご意見をありがとうございました。

⑬帰結について、もしかしたらコンフリクトが解決できたら、適応ができたり、継続意思が固めたりなどポジティブな変化があるところが終点になってくるのではないか。

→大変貴重なご意見をありがとうございました。

【感想】

この度、研究会で貴重な発表の機会をいただき、本当にありがとうございました。大変勉強になりました。SV を勤めてくださった阿部先生には、ワークシートの立ち上げ、理論的メモの書き方、分析テーマの設定などについて丁寧に指導していただき、言葉では言い表せないほど感謝しております。そして、発表当日に、フロアの皆様からたくさんのご指摘やアドバイスお言葉をいただき、回収資料にもたくさんコメントを記載していただき、誠にありがとうございました。

今回の発表を通して、自分の不足しているところ（分析テーマの絞り込みや概念名の付け方、理論的メモの書き方など）に気づきました。今後、M-GTA に対する理解を深めるために努力し、木下先生の著書などを一から読み直したいと思います。また、皆様からの建設的なアドバイスを参考にしながら再度データに向き合い、データのそれぞれの意味をしっかりと読み取り、分析全体を見直してきたいと思います。今後ともご指導のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

参考・引用文献一部

アフタモヴァアフタモヴァ, イローダ (2012)「日本企業で働く在日ウズベキスタン・ムスリムから見た異文化間葛藤と異文化教育の課題についての事例的研究」『上智大学教育学論集』46,49-60.

石原美知子 (2012)「日本の医療現場における中国人看護師とコミュニケーション—病院赴任直後の言葉の問題を中心に—」『コミュニケーション科学』36,67-81.

木下康仁 (2003)『修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂.

龔佳奕 (2018)「多文化就労場面における中国人看護師の適応実態に関する調査」『移動する人々のアイデンティティと言語使用 接触場面の言語管理研究 vol.15』67-73.

小松翠・黄美蘭・加賀美常美代(2017)「多文化就労場面における中国人元留学生の異文化間葛藤と解決方略」『お茶の水女子大学人文科学研究』13,41-54. .

Stella Ting-Toomey (2017)「Conflict Face-Negotiation Theory」Xiaodong Dai, Guo-Ming Chen『Conflict Management and Intercultural Communication — The Art of Intercultural Harmony』pp123-138.

萩原孝恵 (2015)「グローバル人材として働くタイ人社員の異文化葛藤—来日3か月目のインタビューの分析—」『山梨国際研究 山梨県立大学国際政策学部紀要』(10),77-84.

法務省【在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表】

〈http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html〉

（最終閲覧日：平成31年3月20日）

Thomas, K.W. (1976) Conflict and Conflict management. In M. D. Dunnette (Ed.), The Handbook of Industrial and Organizational Psychology. Chicago, IL: Rand McNally.

ト雁 (2017)「在日中国人看護師の異文化適応問題に関して—現場調査のデータ分析より—」『淑徳大学研究紀要』（総合福祉学部・コミュニティ政策学部）51,117-130.

【SV コメント】

阿部 正子（新潟県立看護大学）

張さんの研究テーマは、日本の医療機関で外国人看護師と日本人看護師が働く多文化就労場面に注目し、これから日本で外国人看護師・介護福祉士の受け入れが増大すると予想される中で、どうしたら彼らが日本の現場に安定的に定着できるかという課題への示唆が得られる重要な課題です。

今回張さんは、分析テーマを「多文化就労場面における中国人看護師による異文化間コンフリクトの認知から帰結までのプロセス」とし、離職意思「あり」と「なし」に分けてそのプロセスを検討していました。しかし7名の聞き取りデータを半数に分けてしまうことで、概念生成において理論的飽和が検討できるのかという疑問が生じました。さらに、フロアーからもご意見がありましたが、「(異文化間) コンフリクト」という言葉はどのような意味で

使われているのかあいまいで、定義が必要な言葉であるということがわかりました。分析テーマには基本的に定義が必要となる言葉を用いない方が良く、山崎先生のワークショップでもお話しがありましたので、ここは再検討が必要です。張さんは離職意思の有無でコンフリクトの解決方略が異なるのではないかという仮説をお持ちですが、現時点で離職意思はあっても将来的に変更される可能性もあります。また離職の意思決定は仕事上のコンフリクトの未解決だけが理由ではないと思うのです。それならば対象者を分けずに、就労中に生じるコンフリクトの解消に向け、どのような方略を取っているのかを明らかに出来ると良いのではと考えます。

次に初学者にとって難しいのは、概念を生成する際にデータをどう解釈するかという点だと思います。張さんの概念名を見て相互作用を意識していることはわかるのですが、「分析焦点者から見てどうか」という視点が弱いかなと思いました。この研究の場合、「中国人看護師」としてどういう意味になるのだろうか、という視点でデータを見ていく必要がありますが、概念名にはそうしたニュアンスが読み取れませんでした。例えばナースコールが鳴ったとき、彼女たちは出来るだけ取らずに済むように日本人の同僚に支援を要請する場面があったとします。それは患者の言っていることがわからない（日本語が不得意）という場合もありますが、患者の要望を取り違えないようにする配慮とも考えられます。そうした、彼らの行動の意味を理解し予想して対応が出来れば、彼らは安心して職務に従事できるかもしれません。M-GTAは人間の行動予測に有効であり、実践的活用のための理論として提示できることが強みです。そこをぜひ生かして欲しいです。

最後に、グラウンデッド・セオリーを提示する研究者は、その現場に還元する理論を提示する義務があります。その際、現場にいる人々がすでに知っていることだけをただ羅列するのではなく、彼らがそれまで気づかなかった新しい視点を提示しなくてはなりません。これは木下先生の著書にある言葉であり、研究のオリジナリティについて示唆しています。この研究知見を読む人、活用する人を想定することが大事で、それを踏まえて結果図を見てみると、そうした視点が示されているかどうかチェックできると思います。

最後になりますが、張さんの研究は社会的意義が明確で、これから必要とされる研究です。ぜひ投稿までやり遂げて下さい。応援しています。

【第2報告】

張 銀曉（武蔵野大学大学院）

ZHANG Yinxiao : Graduate School of Musashino University

「日本人の異文化間親友関係構築と維持の認知的プロセス—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによるモデルの構築」

The Cognitive Process of Intercultural Intimate Friendship Formation and

Maintenance of the Japanese People

A Model Constructed Through a Modified Grounded Theory Approach

1 研究背景

グローバル化の進展とともに、世界の高等教育機関に在籍する留学生の数は年々増加し、2016年にはおよそ470万人に達している（Organization for Economic Cooperation and Development, 2016）。日本国内の高等教育機関に在籍する留学生の数も、2018年7月には29.8万人に達している（日本学生支援機構, 2018）。留学生の増加に伴い、留学生とホスト国の人々との交流や友人関係構築につながる接触機会も増えているといえよう。しかし、日本における留学生数が増加する一方、日本人学生の海外留学数はだんだん減少し、2004年ピーク時の82,945人から2014年には53,197人になっている（同上）。その原因の一つとしては、日本人学生の「内向き志向」を指摘している（朴, 2016）。この現状に対して、グローバル人材を育成するために、ホスト側である日本人と留学生の交流および友人関係構築は欠かせないことが指摘されている（西岡・八島, 2018）。また、これまで多くの先行研究によって、留学生のホスト国の人々との友人関係構築は、満足度の高い留学生活、学業成績、異文化適応や偏見低減などにおいて、重要な効果があることが明らかにされている（Rohrlich&Martin, 1991; 横田, 1991; Searle&Ward, 1990; Furnham & Erdmann, 1995; Pettigrew, 1988; Ward&Masgoret, 2004; 松下, 1999; 園田, 2011 など）。しかし、実際に留学生がホスト国の友人を作ることは難しく、留学生が期待する親密な友人関係を得ることができず、両者の関係性は浅い段階にとどまる場合が多いことが指摘されている（Furnham&Alibhai, 1985; Sawir&Forbes-Mewett, 2010; Ward&Masgoret, 2004; 貫田・ウリガ, 2013; 李文, 2015 など）。また、Gareis, Merkin&Goldman (2011) は、留学生とホスト国、自国と他国の三つのグループの友人の数と友情の質についての調査を行い、留学生はホスト国の友人に対する満足度が一番低いことを指摘する。

以上のことから、留学生がホスト国の友人を作ることは、学校適応や異文化適応、偏見低減などにおいて重要な効果があるという認識がありながらも、両者の友人関係はうまく構築できていないことがうかがえる。したがって、留学生のホスト国の人々との友人関係が関係性の浅い段階を乗り越え、双方が満足する親密な友人関係を構築することは重要な課題だといえる。そこで、本研究は、留学生とホスト国の人々との異文化間の親友関係の構築と維持に着目する。

2 先行研究

2.1 異文化間における友人関係

友人関係の概念は文化的に位置づけられることが多くの研究により示されている（Gudykunst, 1985; Gareis, 2000; Chen, 2005; 山崎・張, 2009; Li, 2010; 上原・

鄭・坪井, 2011 など)。例えば、Chen (2005) では、中国の友人関係は個人間で共有されている共通の文脈で、実用的な有用性から始め、後で情緒的になるという。また、Gareis (2000) では、アメリカ人の友人関係は、一般的に高速、低義務、低期間および信頼性が高いと述べる。また、上原ら(2011)の日本、台湾、中国の大学生の友人観についての調査は、友人関係に対してそれぞれ異なる社会的距離と負担量を持つことを指摘する。つまり、文化背景の違いによって、友人関係に対する意味づけが異なることがわかる。

また、背景が異なる人々の実際の付き合いにおいて、文化的要素だけではなく、環境や立場などによって、友人関係の捉え方に変化をもたらすことが多くの研究により指摘されている(高井, 1991 ; Collier, 1998; Gareis, 1995; Kudo&Simkin, 2003 ; 内藤, 2012 など)。例えば、高井(1994)は、縦断的に留学生友人ネットワークの供給源を調査した。その結果、「情緒的サポート」(相談、共感など)に関しては、一次調査では同国出身者、日本人、他国出身者の順で、二次調査では日本人、同国人、他国出身者の順位になり、「道具的サポート」(金銭、手伝いなど)に関しては、同国人出身者は一次調査では50%で、二次調査では39%までに下がっていると述べる(同上)。また、内藤(2010)は、日本人大学生を対象に、友人に対する情緒的サポート、情動的サポートおよび物質的サポートについての調査を行った。その結果、同国の友人と異文化の友人ともに、異文化環境下で留学生の立場であるほうが、ホスト国の立場であるときよりも友人に対する期待が高いことを指摘する。つまり、友人関係に対する捉え方は、静的・固定的なものではなく、実際の付き合いの中で常に変化していると考えられる。

以上のことから、友人関係に何をどの程度期待するのかは、文化により異なることが分かる。また、異文化間の友人関係は、静的・固定的なものではなく、実際の付き合いの中で常に変化する動的なプロセスであるといえる(Kudo&Simkin, 2003 ; 工藤, 2003a)。さらに、Chen (2006, 2010) は、文化を問わず異文化間の友人関係が親密になるにつれ、自己開示の量および深さが増加することを指摘する。そこで、本研究では、日本国内の日本人の視点から異文化間の親友関係構築と維持のプロセスを検討するため、親友関係の概念は日本人側が想定する親友関係を研究対象とし、「心を許して何でも話すことのできる関係」(p.84)という横田(1991)の定義を用いる。

2.2 留学生のホスト国の人々との友人関係構築に関する影響要因

留学生のホスト国の人々との友人関係構築に影響する要因として、主に言語・コミュニケーション能力、文化的差異、能動的な姿勢と受容性、環境および制度などが指摘されてきた(Kang, 1974 ; Gareis, Merkin & Goldman, 2011 ; Imamura, Zhang&Harwood, 2011 ; 横田, 1991 ; 加賀美, 2001 ; 田中, 2003 など)。Kudo&Simkin (2003) は、留学生のホスト国の人々との友人関係についての研究では、関係構築における要因を明らかにするだけでなく、関係構築を取り巻く発達過程とその関連要因に着目する必要性について指摘している。具体的には、日本人留学生とオーストラリア人の友人関係構築過程の中で、「頻繁

な連絡（親密さと共有ネットワーク）」、「類似性（個人の類似性および年齢）」、「自己開示（英語力とコミュニケーションの開放性）」、「他の国民の受容性（異文化間の志向と共感）」などの要因を指摘している（同上）。また、Generous（2016）は、留学生とアメリカ人の友人関係の開始段階への影響要因について、「国際および外交への関心」、「類似点への認識」、「言葉の壁」、「継続的なつながりと努力の欠如」を指摘している。しかし、これらの研究では友人関係構築を取り巻く発達過程の初期の段階のみを対象としており、親密な友人となる親友関係の構築と維持の段階については、ほとんど言及されていない。留学生のホスト国の人々との友人関係構築において、親友関係構築と維持の段階を含めた、より長期間の縦断的なプロセスに着目する必要があると考える。

2.3 留学生のホスト国の人々との友人関係構築過程のモデル

留学生のホスト国の人々との友人関係構築過程に関する研究は重要であるとされる一方で、留学生の友人関係構築行動についてホスト側がどう知覚しているのか、ホスト側の受容性と不受容性、寛容さと不寛容さについて、相互作用的な観点から友人関係構築モデルが体系化される必要があるということが多くの研究で指摘されている（工藤，2003a；Generous，2016）。工藤(2003a)は、理論的研究から導き出した「異文化友人関係の形成過程モデル」を提示し、4つの段階で構成されるとする（図1）。この工藤(2003a)の理論モデルに基づき、佐々木・張・鄭(2012)では、中国人留学生の体験的な語りを通して、実践に役立つ実証的なモデルを再構築した。佐々木ら(2012)と工藤(2003a)のモデルと比較すると、「接触前の認識」と「関係維持への心配」(p.109)という二つの新しいカテゴリーが追加され、友人関係が成立していない理由として、主に「文化的背景の違い」と、「単なる一方的な働きかけ」という二つの要因があることを指摘している。しかし、佐々木ら(2012)は、留学生の積極的な働きかけについての言及がある一方で、受け入れ（ホスト側である日本人）からの働きかけについての語りは現れなかったと述べる。また、このモデルは友人関係構築までの段階を提示し、より関係性が発展した親友関係の構築および維持の段階については対象としていない。したがって、これまでの留学生の視点からの研究成果を参照しつつ、ホスト国の人々の側の視点から、友人段階のみならず親友段階までの対象とした異文化間親友関係構築と維持の実証的なモデルを提示することが期待されているといえよう。

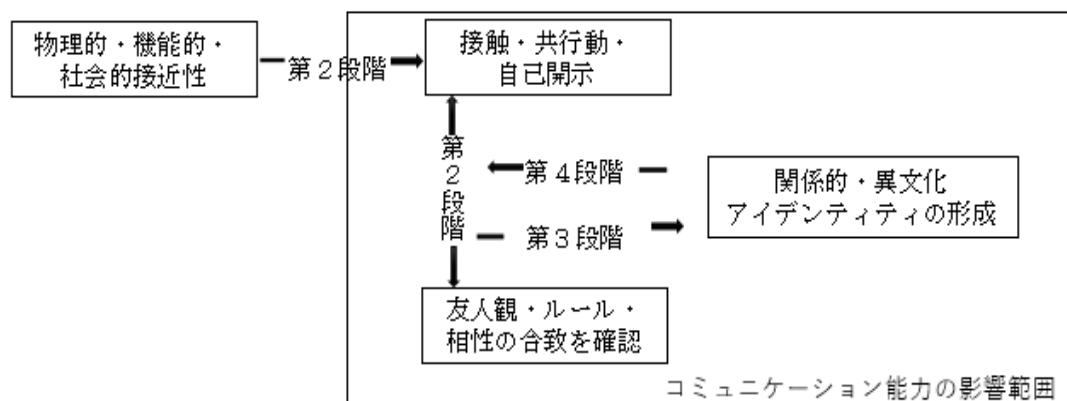


図1 異文化友人関係の形成過程モデル（工藤,2003b,p.19）

3 研究目的

本研究では、ホスト側である日本人(以下は日本人)を対象に、異文化の日常的な親友関係の形成はどのようなメカニズムで生じ、どのような要因によって維持できるのか、両者の相互作用にもとづいた過程を明らかにする。工藤(2003a)の「異文化友人関係の形成過程モデル」、佐々木ら(2012)の「友人関係構築をめぐる体験モデル」は、留学生の視点からの友人段階までの関係構築のモデルであるが、本研究における研究の独自性は、より発展的な親友段階までを対象とするとともに、ホスト側の日本人の視点から異文化間親友の関係構築と維持に関するモデルを提示することにある。

4 研究方法

本研究の方法は、修正版グラウンデッド・セオリーアプローチ（以下 M-GTA）を用いる（木下 2003）。M-GTA はデータに多重的同時並行の比較分析を通して、概念を創り、統合的に説明図(モデル)を構築し、社会的相互作用に関係する人間行動を説明と予測するプロセス理論である。分析は切片化せず、文脈を重視し、自分の関心に忠実に解釈できる。研究結果は問題となっている現実的の現象に対して、解決や改善に役に立ち、実践的に活用される。本研究の異文化間親友関係は一定の枠組の中で展開するプロセスで、双方の働きかけ、やり取りによって構築される。本研究の目的に照らして、M-GTA は妥当な分析方法だと判断する。

4.1 協力者と調査方法

本研究は、日本人側の認知に基づく異文化間親友関係構築と維持のプロセスに注目する。

この親友関係構築と維持のプロセスは、直接観察することができないプロセスであるため、対象者は、友人構築の過程の中でどのような行動をとるのか、どのような感情を伴うのかについて、半構造化インタビューを行った。また、本研究では、異文化間親友関係構築のプロセスだけでなく、親友関係の構築と維持に影響を与える要因を解明する。調査対象者の異文化間親友関係は、一定期間を経なければならない。したがって、調査対象は留学生と一年以上の友人関係を持つ日本人とし、サンプリングの中で、留学生の親友がいる日本人を選定した。調査は2回行い、第一回目は2018年7月から8月にかけて実施した5名、第二回目は2019年1月から2月にかけて実施した5名で、合計10名を分析対象とした。調査協力者の詳細を表1に示す。

表 1 対象者の概要

対象者	性別	職業	専門	年生	留学経験	異文化授業	付き合う時間	相手の出身
A	女	社会人			ない	ない	1年半	中国
B	男	学生	言語系	4	短期	取った	1年半	イギリス
C	女	学生	言語系	3	短期	取った	2年	中国
D	女	学生	言語系	3	一年	取った	5年	中国
E	男	学生	経済系	4	8か月	ない	2年	中国
F	女	社会人	言語系		1年	取った	7年	中国
G	女	学生	言語系	2(院)	1年	取った	10年	オーストラリア
H	男	学生	経済系	3	ない	ない	1年半	ミャンマー
I	女	社会人			ない	ない	3年	フィリピン
J	男	学生	文化系	1	ない	ない	2年	イギリス

調査する前に、調査協力者に研究の目的と意義、データの匿名化や秘密保持など研究倫理を説明し、得られたデータの取り扱いなどについて口頭および文書で対象候補者に説明し、調査協力者の承諾を得て同意書とプロフィールを記入してもらった後、インタビューを行い、ICレコーダで録音した。半構造化インタビューにおいては、まず、記入したプロフィールについての疑問点を調査協力者に確認し、現在の友人ネットワークおよび学習環境をインタビューした。次に、外国人の親友だと思う人の具体像を引き出したうえで、どのように親友になったかについて聞いた。複数の親友がいる場合は、最初に頭に思い浮かぶ友人を一人に絞りインタビューを行った。インタビュー時の使用言語は、すべて日本語である。インタビュー時間は一人約60分であった。

4.2 調査項目

本研究では、日本人を対象に、異文化の日常的な親友関係の形成はどのようなメカニズムで生じ、何が理由となって維持できるのか、両者の相互作用にもとづいた過程を明らかにす

る。この目的を踏まえ、調査協力者に対するインタビューの質問事項は以下のとおりである（詳細な項目は資料2参照）。

主な質問項目：現在の友人ネットワーク

留学生との親友構築と維持の過程

自国友人と付き合いの相違点および葛藤

以上の項目について、最初の2名のインタビューを行った。3人目のインタビューは、2名のデータを分析したうえで、目的に関連する項目を追加した。例えば、接触動機や日本的な文化に関する葛藤などの質問をより詳しく聞いた。これは「データの収集と分析の同時並行性、あるいは、サンプリングによる理論的飽和化までの継続的比較分析」（木下 2003:123）と一致していると考えられる。これにより、概念生成が効果的に行えたと考える。

4.3 研究テーマ

研究テーマは、日本人と留学生の親友関係はどのように構築し維持できるかを明らかにすることである。

4.4 分析テーマへの絞り込み

当初の分析テーマは、「日本人の視点に基づき、留学生との親友関係の形成はどのようなメカニズムで生じ、何が理由となって維持できるか」としていたが、分析テーマの絞り込みについてもう少し短く端的に表現するというスーパーバイザーからのアドバイスを受けた。それによって、分析テーマは、「日本人の留学生との親友関係を構築し維持するプロセスの研究」に変更した。分析のスタートは、日本人と留学生の接触の始まり、ゴールは、日本人と留学生の親友関係が構築され（成立し？）維持されている状態である。

4.5 分析焦点者の設定

留学生の親友がいる日本人

5 結果

分析ワークシート、カテゴリー生成、結果図、ストーリーライン(回収資料2参照)。

6 実践的示唆

本研究は、日本人の視点に基づく異文化間親友関係構築と維持のプロセスのモデルを提示した。日本国内における異文化間の交流および友人関係は実践現場の問題解決と相談支援活動に示唆を与えられとされる。本研究におけるモデルから日本人は、異文化間親友の関係構築と維持に対して、主に受動的な付き合い方を持ち、積極的にコミュニケーションを

とらず、自文化のルールを保持しようとする姿勢を示している。日本人は留学生と付き合うとき、相手の考え方や価値観などに対する理解、自文化への内省的態度を持つことが重要であろう。日本国内においても、日本的な遠慮と察しのコミュニケーションスタイルを持ちつつ、多様な価値観を持つ留学生の間で、お互いに尊重しながら、率直に、丁寧に表現できるコミュニケーションをとることが必要であろう。

また、日本人の言語不安や異文化接触不安による受動的な付き合い方に対して、留学生はアルバイト先や学校などで、積極的に日本人に声をかけ、コミュニケーションをとろうとの努力が重要であろう。留学生は日本において、「郷に従え型」ではなく、自文化への内省的態度を持ちつつ、日本的な「遠慮」や「察し」や「グループ協調」などを理解し、お互いに尊重する友人関係の構築が重要であろう。

7 今後の課題

本研究の課題として、調査協力者は日本人10名の小人数であり、性別や年齢などを含め、その属性は多様であることから、一般化には問題があると考えられる。たとえば、一般的な日本人と比較すると、日本人大学生は留学生との接触機会が多く、異文化間の友人関係が構築しやすいと考えられる。また、何らかの形で海外へ留学する経験や異文化に関する授業を受けた経験を持っていた日本人大学生は一般的な日本人大学生より、異文化間接触不安や言語不安などが少なく、友人関係構築に影響を与えられと考えられる。今後は、日本人、日本人大学生とその関連背景などを取り入れ、詳細な検討が必要である。

また、親友の相手はアジア系を中心に、特に中国人の留学生が多い。もともと日本や中国は、間接的なコミュニケーションを多用して、ハイ・コンテクストの国であるといわれる。その点について、欧米系のロー・コンテクストの人々との付き合いについても調査すべきである。さらに、今回は日本人からの視点で異文化間親友の構築と維持のプロセスのモデル化を試みた。人間関係の構築は相互作用の過程の中で作りあげていくものであるため、今後は留学生の視点からの研究が必要である。最後に、友人関係構築の中で、ジェンダーによって親密間の差があることがうかがえた。しかし、本研究では、調査協力者の人数の限界があるため、詳細な分析を行うことができなかった。以上の点から、本研究の結果の一般化には一定の限界があると考えられる。今後は包括的に対象者を拡充したうえで、より詳細な分析が必要である。

8 振り返って

① オープン化の段階

困難：データを解釈する時、個人の考えや価値観や発表者の留学生としての立場などが、無意識に入ってしまった。また、データに向かい、同じカテゴリーのバリエーションに対して

いくつかの解釈により、関連するバリエーションについて選択的判断するとき、類似例とか対極例とか本当に関係があるかどうかについて迷った。

工夫：M-GTA のオープン化は無限的にオープン化するのではなく、すべての解釈は分析テーマと分析焦点者に照らさなければならない。自分の考えは分析テーマと分析焦点者に照らして、こまめに理論的メモに書いた。また、M-GTA では、自らを「研究する人間」に位置づけ、データの解釈のときに、「誰が、何のために、なぜ、その研究するのか」と自分に問い続けながら、指導共感とゼミのメンバーにできるだけ自分の関心を論理的に説明した。自分なりの「先入観」や「バイアス」などは一定の範囲で制御できたと考えられる。

② 収束化の段階

困難：データとの距離がだんだん遠くなり、無意識に作った概念の影響を受け、理論的飽和化に達していることを自分なりに判断した。

工夫：M-GTA はデータに位置づける研究方法で、理論的飽和化はデータに向かって判断しなければならない。作った概念やカテゴリーはもう一回データに向かって、新しい解釈が出てこないかどうかについて改めて確認した。

③ 結果図の作成段階

困難：異文化間親友関係構築と維持は一定の枠組みの中で発展し、全体のプロセスははっきり見えてきた。しかし、結果図は全体的に分類になってしまう傾向があり、現象に「動き」の特性がはっきり見えてなかった。

工夫：「プロセスとは時間の流れではなく、動きのプロセス」というスーパーバイザーからのアドバイスを受け、「具体的な内容部分を抜き取った後に」、何が見えるのかについて、もう一回考え直して、結果図を修正した（回収資料2参照）。

④ 疑問点

日本人が留学生と知り合い、親友関係を構築し維持するまでは、長いプロセスである。提示する時、わかりやすさから考えると、二つの段階に分けた。しかし、全体的な関係性が切れる傾向があり、プロセスとしての連続性が弱くなった。どのようにすればいいのか、最も迷ったところである。

9 論文の作成の流れ

2018 年 4 月から 5 月まで研究背景と研究目的、発表一回(ゼミ週一回)

2018 年 6 月から 7 月まで研究方法と調査方法 発表二回(ゼミ週一回)

2018 年 7 月末から 8 月まで半構造インタビュー調査

2018 年 9 月から 11 月までデータ分析と結果図の作成(ゼミ週一回)

2018 年 11 月末から 2019 年 1 月まで論文の執筆

以上は 5 名のデータを使った、1 回目のデータを分析対象とした修士論文の作成の流れ

10 追加データ

2019 年 1 月から 2 月まで半構造インタビュー調査(追加 5 名)

2019 年 2 月から 3 月まで追加データ分析と結果図の修正

11 会場からのコメント概要

① 研究テーマ

日本人を対象とする理由

親友関係に焦点を当てた理由

友人関係について、どのようにとらえるのか

② 調査協力者

5 名のデータを追加した理由

対象者の属性

対象者の親友の属性

③ 分析テーマと分析焦点者

分析焦点者を設定する理由

研究テーマから分析テーマへの絞り込む理由

④ 概念生成

最初の作った概念理由

概念の命名を修正した理由

概念の命名から意味を読み取れなかったこと

概念と概念の関係性が読み取れなかったこと

概念が分類になってしまう傾向

概念を作ったとき、分析焦点者と分析テーマに照らさなかったこと

⑤ カテゴリー生成

概念とカテゴリーの関係性が現れなかったこと

カテゴリーとカテゴリーの関係性が現れなかったこと

カテゴリーの生成した理由

⑥ 結果図

動きのプロセスではなく、時系列になってしまう傾向

カテゴリーから見ると、本研究のオリジナリティが現れなかったこと

M-GTA は数字で使う研究方法ではないこと

11 感想

このたび、大変貴重な機会を頂き、誠にありがとうございました。

SV の坂本先生を始め、会場の先生方から貴重なコメントをいただき、M-GTA についての理解を深めることができました。まず、研究する人間について、どうしてこういうテーマを選び、どのようにこの問題を解決し、どのような現象を明らかにし、明らかにできる範囲、使う言葉と定義の明白さおよび理由、理論モデルを応用できる対象者と範囲などをきちんと理解できました。次に、分析テーマの設定について、知りたいこと、明らかにしたいことはしっかり考える上で、短く端的に表現することについて学ぶことが出来ました。また、結果図について、単なるプロセスを提示するだけではなく、データと概念の関係性、概念と概念の関係性、概念とカテゴリーの関係性、カテゴリーとカテゴリーの関係性を分析する上で、動的なプロセスを提示することが深く理解できました。

最後に、ご丁寧な指導を頂いた SV の坂本先生、ごコメントを頂いた会場の先生方、参加者様、回収資料にコメントしてくださった皆様に心から深く感謝申し上げます。これからも引き続き皆様のご指導をいただけますと幸いです。
どうぞよろしくお願い申し上げます。

方法論の参考文献

- 木下康仁(1999). グラウンデッド・セオリー・アプローチ: 質的実証研究の再生. 弘文堂.
木下康仁(2005). 分野別実践編, グラウンデッド・セオリー・アプローチ, 弘文堂.
木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂.
木下康仁(2009). 質的研究と記述の厚み: M-GTA・事例・エスノグラフィーグラウンデッド・セオリー・アプローチ. 弘文堂.

参考文献

- 石原翠 (2011)「留学生の友人関係における期待と体験の否定的認識との関連—中国人留学生の場合」『異文化間教育』第 34 号, 136-150.
上原麻子・鄭加禎・坪井健(2011)「日台中における大学生の友情観比較—間主観性概念の検討をもとに」『異文化間教育』第 34 号, 120-135.
加賀美常美代(2006)「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか」『異文化間教育』第 24 号, 76-91.
工藤和広(2003a)「異文化友情形成におけるコミュニケーション能力—留学生の知覚に基づくモデル化の試み—」『Human Communication Studies』第 31 号, 15-34.
工藤和宏(2003b)「友人ネットワークの機能モデル再考—在豪日本人留学生の事例研究から—」『異文化間教育』第 18 号, 95-108.
小松翠 (2012)「中国人留学生の友人関係に関する体験の否定的認識と友人関係への不満、原因帰属の関連について」『人間文化創成科学論叢』第 15 号, 83-91.

- 小松翠(2013)「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』第12号, 71-86.
- 佐々木泰子・張瑜珊・鄭士玲(2012)「中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究」『異文化間教育』第35号, 104-117.
- 柴田有喬(2008)「留学生の日本人学生との交流の実際と期待—対留学生の半構造化面接から」『言語と交流』第14号, 11-28.
- 戦旭風(2007)「友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係」『留学生教育』第12号, 95-105.
- 日本学生支援機構(2018)『平成29年度 外国人留学生在籍状況調査』https://www.Jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html (2019.07.15 閲覧)
- 貫田優子・ウリガ(2013)「在日外国人留学生の社交性と交友ネットワーク：大阪大学・京都大学の外国人留学生を対象としたアンケート調査から」『日本語・日本文化』第39号, 1-23.
- 藤美舫(2013)「日本人学生の多文化クラス受講の効用—留学生との友人関係構築に関して」『比較文化研究』第107号, 91-103.
- 山川史(2012)「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』第38号, 100-115.
- 山崎瑞紀(1997)「留学生と日本人学生間の友人関係成立に関する一考察」『学術研究（教育心理学編）』早稲田大学教育学部, 37-42.
- 横田雅弘(1991)「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』第5号, 81-97.
- 横田雅弘(2013)「第7章 日本人学生の国際志向性」横田雅弘・小林明編『大学の国際化と日本人学生の国際志向』学文社, 57-178.
- 李文(2015)「中国人留学生の友人ネットワーク」『同志社社会学研究』第19号, 47-63.
- Bart.R., & Eimear-Marie.N(2014) Understanding friendship and learning networks of international and host students using Longitudinal Social Network Analysis. *International Journal of Intercultural Relations* 4, pp.165-180.
- Collier, M. J. (1996). Communication competence problematic in Ethnic friendships. *Communication Monographs*, 63, 314-336.
- Chen, Y. -W. (2006). Intercultural friendship from the perspectives of East Asian international students. *China Media Research*, 2(3), 43-58.
- Furnham, A. & Bochner, S (1982) Social Difficulty in a foreign culture: An empirical analysis of culture shock. In: Bochner, S, (eds.) *Culture in Contact: Studies in cross cultural interaction*. pp.161-198.
- Gareis, E. (2000) Intercultural friendship: five case studies of German students in the

USA. Journal of Intercultural Studies, 21(1), pp. 67–91.

Gareis, E. Merkin, R. & Goldman, J. (2011). Intercultural Friendship: Linking Communication Variables and Friendship Success. Journal of Intercultural Communication Research. 40(2), pp. 155–173.

Kudo, K., & Simkin, K. A. (2003). Intercultural friendship formation: The case of Japanese students at an Australian university. Journal of Intercultural Studies, 24, 91–114.

Ward, C., & Masgoret, A. M. (2004). The experiences of international students in New Zealand: Report on the results of the national survey. New Zealand: International Policy and Development Unit, Ministry of Education.

【SV コメント】

坂本智代枝（大正大学）

発表前の SV では以下の点についてコメントさせていただきました。

- ① 分析テーマの絞り込みについて、テキストにもあるように、「日本人が留学生との親友関係を〇〇するプロセス」等に短く端的に表現するようにすること。
- ② この研究の社会的意義はどこにありますか。
分析焦点者は誰ですか、この研究結果はどのような人々に貢献できますか？
- ③ 最初に作った概念はどの概念ですか？
- ③ 1 回目の分析と 2 回目の分析の変化した点はどのようなことでしょうか？
- ④ 親友関係の成立と親友関係の維持がコアだと考えますが、概念を分類している分析になっているので、プロセス性が見えない。プロセスとは時間の流れではなく、動きのプロセスです。

発表の時には分析テーマが明確になり、何を明らかにしたいのかが明確になってきました。そのうえで、以下の通りコメントさせていただきます。

- ① 先行研究等研究背景もしっかりまとめられているので、分析焦点者の設定の意義が明確になっていると思います。
- ② 分析の手順として、データに密着した理論ということで、ディテールの濃いデータから分析し、概念を作成し関係図を作成しながら、データの分析も同時に行う作業が必要かと思います。どうしても、概念を全部作成してから、分類する作業になっているので、うごきのプロセスが見えない結果図になっていることが残念です。
- ③ コアになるデータが見えているところがあるので、再度そこから分析を行い、関係図

を作成することで、よりよい分析結果となると考えます。

今後の成果に期待したいと思います。

【ミニワークショップ】

進行：山崎浩司（信州大学）

Koji Yamazaki : Shinshu University

M-GTA の分析テーマの設定と分析方法

**M-GTA研究会
第12回修士論文発表会**

2019年7月20日@大正大学

**＜ミニワークショップ＞
M-GTAの分析テーマの設定と分析の始まり**

山崎浩司（信州大学）

- 木下先生
 - 高齢夫婦世帯における夫による妻の介護プロセス
- 阿部先生
 - 体外受精を受療している不妊女性の治療継続の経験的プロセス
- 伊藤先生
 - 患者への気がかりをもとに看護していくプロセス
- 唐田先生
 - 産科医療施設の看護職者が「気になる親子」の情報を提供してから他機関との連携が発展するプロセス
- 倉田先生
 - 胃瘻増設の代理決定をした介護者が退院してから在宅で新たに胃瘻を用いて介護していくプロセス
- 坂本先生
 - 精神保健福祉士がピアサポーターを支援する経験を通して成長するプロセス

2

- 佐川先生
 - 統合失調症患者の薬に対する主体性獲得プロセス
- 丹野先生
 - 臨床心理実習の内部実習におけるスーパービジョンプロセス
- 都丸先生
 - 生徒との人間関係に悩みを抱いた中学校教師が生徒との関わりを維持していくプロセス
- 根本先生
 - 語学教育センター修了生の日本語学習のプロセス
- 林先生
 - 夫を在宅で介護する妻の介護役割受け入れプロセス
- 山崎
 - 性的に活発な高校生がコンドーム不使用へと傾倒していくプロセス

3

ミニWS出席の研究会スーパーバイザーによる分析テーマの特徴

- すべて「～プロセス」で終わっている
- 端的(シンプル、コンパクト)なものが多い
- それ自体が定義を要する言葉がほぼ使われていない
- 分析焦点者が明示されているか推測できる

4

なぜ分析テーマの設定がうまくいかないのか？

- 問題関心と社会的・学術的意義の明確化が不十分

＜問題関心の明確化＞

- 本当に「社会的相互作用の展開過程としてのプロセス」の問題に自分は関心があるのか？

＜社会的意義の明確化＞

- 「第3のインターラクティブ性」を具体的にイメージする

＜学術的意義の明確化＞

- 先行研究の「確認」ではなく「批評」をする

5

分析テーマの設定

1. インタビューガイドの内容を参考にする

- ・自分が一番したい質問は何なのか？

これが社会的相互作用と関係なければ、恐らく自分の関心はプロセスになく、M-GTAがベストか怪しい

2. データの特性を予測しつつ設定する

3. 実際のデータは自分の予測を超える特性を有することを前提する

- ・分析テーマ修正必要なしと思ったらおかしいと思え！

6

分析の始まり

1. 分析テーマと照らし合わせて、もっともディテールが豊富な語が多い逐語録を選ぶ

2. 機械的にその逐語録の頭から分析（概念生成）を始めるのではなく、分析テーマと照らし合わせて、「ここが重要」と自分が判断したところから始め、この選択的判断をくり返していく

- ・なぜそこに最初に注目したのか、なぜ重要なのか、根拠を理論的メモに明記する
- ・分析ワークシートにヴァリエーションを列挙する際に、選択的判断の展開過程がわかるよう、順序を入れ替えない

7

分析ワークシートを使った 概念生成の手続き

- ① 逐語録を読み込み、分析テーマと照らし合わせて重要と判断したデータ部分(バリエーション)を一つ選び出し、分析ワークシートの「バリエーション」欄に書き込む
- ② バリエーションの意味を深く解釈し、定義として文章化して、「定義」欄に書く
- ③ 暫定的な定義を踏まえて、それよりもコンパクトでインパクトのある暫定的な概念名を考え、「概念」欄に書き込む
- ④ 暫定的な定義・概念名と照らし合わせて、類似と対極の両方向でバリエーションを探し、類似のものは「バリエーション」欄に、対極のものが見つければ「理論的メモ」欄に、それぞれ書き込む
- ⑤ ④をくりかえす過程で、必要に応じて暫定的な定義と概念名に修正を加える

「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)」
サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編『ワードマップ 質的研究法マッピング』新曜社(近刊) 所収

8

【参加体験記】

丹野ひろみ(桜美林大学)

山崎先生のミニレクチャーの後、参加者はAからFまでの6グループに分かれて、各グループにスーパーバイザーが1人あるいは2人つき、M-GTAについてディスカッションしました。私は、Eグループを担当しました。ミニレクチャーが、分析テーマの絞り込みと分析ワークシートを使った概念生成についてでしたので、そこから議論をスタートしました。メンバーのほとんどは、M2であり、現在、修論に取り組んでいるとのことでした。おおむね、スーパーバイザーへの質問タイムという感じで進んでいきました。

現在、分析中ということもあり、たくさんの質問が出ました。大きな会場で、6つのグループが議論中であり、大声で必死に答えていたこともあり、その全体の記憶が定かではないことから、私の記憶に残ったものを、いくつかあげます。「データーを読んでいても、どこか重要か分からない」、「理論的飽和化の判断ができるかどうか心配だ」、「追加データーの収集の判断はどうするのか」などなど。とりわけ、「大学院に、M-GTAを指導できる教官がいないので、不安だ」。これは切実な問題ですね。そのために、この研究会があるのだと思います。研究発表だけでなく、ときには、このようなワークショップも会員の皆さんにとって役立つものになると実感した1日でした。

都丸けい子(聖徳大学)

ファシリテートした F 班は、9 人構成であった。まず、全員が話し合いに参加できるよう 3 人組に分かれた。その後、話し合いの呼び水として、二つの修論発表および各自の研究を踏まえ疑問に思う点を挙げ話し合うよう促した。以降、各組のダイナミズムを見守りながら、ファシリテーターは適宜挙げられた疑問に介入した。最後に、終了前の 10 分を用い、各組で挙げられた話題をシェアリングした。

挙げられた疑問は「分析焦点者を設定する際の根拠の述べ方とは?」「分析テーマの始まりと終わりとは?終わりの定め方とは?」「分析テーマの絞り込みと分析焦点者との関連とは?」などであった。幸いなことに、各 3 人組のなかに 1 人以上、M-GTA を用いた分析経験者、今まさに分析中の者が含まれていたため、疑問自体が非常に具体的なものとなった。さらに、分析を行った／行っている経験を踏まえた体験談や助言も多く飛び交っていたようである。たとえ研究テーマや領域が異なっている、互いに建設的な対話ができただけで、本研究会の強みが大いに反映されたワークショップとなった。

◇近況報告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード、(5) 内容

(1) 菊地 真実 (きくち まみ)

(2) 帝京平成大学

(3) 医療人類学・社会薬学

(4) 在宅医療・薬局薬剤師・医療の生活化

(5) 私は、2008 年頃に初めて M-GTA という分析手法を知って興味を持ち、木下先生のご著書を読んだり、M-GTA を用いてインタビューデータを分析し執筆された論文を読んだり、と自分なりに勉強をしていました。しかし、やはり独学では不十分な理解にとどまっていることを自覚し、一念発起して研究会に足を運んだ時のことをよく覚えています。2009 年に初めて研究会に参加した時、参加者の方もととても多くて会の雰囲気やや圧倒されながら、研究発表をされた方とフロアーとの質疑応答が活発な様子を見て、「すごいなあ」と思いつつも、「でもいつかこの場で発表できるようになればいいなあ」と思い、しかし「いやいやムリムリ」と思っていました。

そんなことを考えていた私ですが、2011 年 7 月の修士論文発表会に、成果発表という形で発表の機会に恵まれました。ただ、その日を迎えることができたのは、決して一人の力ではなかったということを今振り返っても強く実感します。

私は、2010年7月に倉敷で開催された第1回合同研究会に参加したのですが、そのときの分析ワークショップでスーパーバイザーとして関わってくださった山崎浩司先生に、8月頃、無理を承知の上で修士論文執筆のために行ったインタビューデータの分析のスーパーバイズをお願いしました。今考えるととても勇気があるといえますか、ずいぶんと大胆な行動だったと思います。そのとき山崎先生からスーパーバイズをしていただける上での条件として提示されたのは、木下先生のM-GTAに関するご著書3冊、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生」(1999)、「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い」(2003)、「ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて」(2007)、およびグレイザーとスト劳斯による「死のアウェアネス理論と看護—死の認識と終末期ケア」を「熟読する」こと、そして、それまでのニューズレターで書かれている研究発表について「すべて読む」ことでした。私は、わかりました！是非お願いします！と、まずは条件として提示されたことを行いました。熟読するということは、まさに熟れるようにじっくりと読むことで、一字一句丁寧に、理解を深めることを心がけて読みました。とはいえ、正直大変なことでした。

そして、その条件をクリアしたときにはすでに10月頃だったでしょうか、その後4回ほど山崎先生にスーパーバイズをしていただきました。スーパーバイズでは、問われることに対して言語化して答える、それを繰り返しました。概念名の検討についても、結果図、ストーリーラインについても、山崎先生から問われ、考え、答えることを繰り返し行いました。他者から問われ、それに対して言語化し説明することで頭の中が整理されていきます。それがいかに重要であるのかということに気づくことができた貴重な経験でした。お忙しい中でもスーパーバイズしてくださった山崎先生には今でも本当に感謝しています。このような経験については、修士論文発表会でも参加者の方にお伝えしたように思います。

私が修士論文に取り組んでいた10年ほど前は、薬学の世界では質的研究をしている方もほとんどいない状態でした。M-GTA研究会では、看護、教育、福祉といった領域を背景に研究されている方が多く、その意味では、いつも自分が身を置く世界とは異なる世界に身を置く方々と研究を通して交流できることも楽しい経験でした。今もその気持ちはずっと変わらずにあります。

私はその後博士課程に進み、博士論文を昨年提出し学位を取得したのですが、実は博士論文ではM-GTAを用いて執筆していません。それは、博士論文において自分が掲げた研究テーマ、何を知りたいのか、というリサーチクエスションに基づいて選んだ分析法が異なる方法であった、ということに過ぎません。しかし今後、私のリサーチクエスションに対してM-GTAを用いることが最も適している、と考えたときは、私は迷わずM-GTAを用います。そのときには、是非、研究会で発表し、問われ、考え、言語化する繰り返をしたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

.....

◇次回のお知らせ

2019 年 10 月 26 日（土） 第 87 回定例研究会

時間：13：00～18：00

場所：清泉女子大学 2 号館 4 階 240 教室

.....

◇編集後記

今回の発表会でも活発な質疑がなされました。発表に対して絶え間なく質疑や意見が上がることは、この研究会の特色でもあり強みでもあります。たとえ、発表テーマや内容が、会場にいた一人ひとりとそれぞれ異なっていたとしても、研究法という共通の土台で捉えると、発表者のみならず会場にいた全員に全ての質疑や意見は反映可能です。そのような理由から、それぞれの研究発表を聞く時間と同等、またはそれ以上に質疑の時間は重要です。

（…と私は思っています。私自身、質疑応答のやりとりを聴きに研究会にきていると言っても過言ではありません）。今回は特に、ワークショップもありましたので、研究法に関する第二の質疑の時間として有益でした。今後、参加者の多くの皆様が質疑に参戦されますこと、心より願っています。（都丸けい子）